

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

私の考える人生

岩手県 花巻市立西南中学校 二学年

小原 穂乃香

「ああ、つまんないの。」
思わずそう呟いた。どんよりとした夏の朝、この一言で私の一日が始まった。中学二年生にもなつて充実した時間を過ごすことができない自分にも嫌気がさしてくる。無意味な日常を繰り返す日々。

そんな私とは裏腹に祖父は毎日楽しそうに忙しくしている。還暦を過ぎて仕事をやめた祖父は家の裏にある畑で何種類もの野菜を作っている。畑にいる時の祖父の姿はとてもカッコいい。でも、そんな祖父の姿が畑から見えなくなった時期があった。それは私が五歳の時だった。祖父の胃にガンが見つかったのだ。祖父はいつも笑顔で弱音なんか一つも吐いたことはなかった。でも本当は、死の恐怖と戦っていたのだと思う。祖父は入院し、手術を受けることになった。

当時を振り返り、私は祖父に、
「おじいちゃんは病気が怖くなかったの？」

と聞いてみた。すると祖父は、
「自分がガンになるなんて思ってたから、正直ショックだった。」

と教えてくれた。そして続けて、
「でもね、万が一の為に生命保険に入っていたおかげで安心もあった。費用の負担も少なく済ませることができたしね。それからは、いつ何が起きても後悔しないようにしているんだよ。」
と、しみじみと言った。自信を持って生きている祖父の姿は、やっぱりカッコよかった。生命保険と自分を見つめ直すことになったのは、祖父のこの言葉がきっかけだった。

私は初め、生命保険と聞いてもあまりピンとくるものがなかった。テレビや広告では、よく目にするけれど、自分とは全く無縁のものだと思っていたからだ。そこで、家族に聞いてみることにした。

父は私が生まれてから保険に入ったらしく、
「お父さんは、穂乃香が生まれて、将来を考えた時、もし自分に万一のことがあっても家族が困らないようにする為に、生命保険に入っ

第55回中学生作文コンクール

たんだ。自分より大切なものができたから入ったんだよ。」
と教えてくれた。父からの愛情を感じた。

また、私自身も生まれてからすぐに親が保険に入れてくれたらしい。この保険は、私が高校や大学に進学する時に必要な多額の費用のサポートにもなるそうだ。私の将来の夢は、たくさんのことを勉強して、多くの人を幸せにできる仕事に就くことだ。そう考えるとこれからこの保険にもっと助けられるなと思った。自分とは全く無縁だと思っていた生命保険がとても身近な存在だったことに気がついた。

生命保険とは、万が一のことが起こった時、家族や自分自身を守ってくれるもの。大きな愛の形のようなものを感じた。

現在は約九十パーセントの人達が様々な保険を利用しているが、トラブルになって例も少なくないようだ。しかし今では、生命保険は私達にとって必要不可欠な存在だ。だからこそ、特性を理解し、万が一に備えて自分に合った保険を正しく使うことが大切だ。

これからの私の将来において、生命保険はより身近な存在になってくることだろう。よりよい人生を送っていく為にも、もっと保険に関心を持ち、日常の平和な生活を送っていけることに感謝して、一分一秒を大切にしていきたい。

そう考えると、「つまらない」という概念を「楽しい」に変えて、どんな一日でも一生の思い出のページにしたいと思えるようになった。辛い時こそ笑顔でいようと思う。そして、私も自分の家族や子供ができた時、自分の家族がくれたのと同じくらいのたくさんの愛情を注いであげたい。生命保険と共に自分の思い描く人生を自分の手で創っていくのだ。

「今日も楽しい一日が始まりそう！」
思わずそう呟いた。晴れ晴れとした夏の朝、この一言で私の一日が始まる。